社会人二人に聞く

「仕事でなく自分が偶像だった」

Lightプロジェクト『信仰と仕事セミナー』

木村さん

高野さん

「Lightプロジェクト 信仰と仕事ミニストリー」(ディレクター・サックス知子)の「信仰と仕事セミナー」が5月14日、オンラインで開催された。テーマは「苛立(いらだ)ちから、仕事の中での神との繋(つな)がりへ」。当日は2人のスピーカーの話を聞くと共に、参加者同士でディスカッションした。【中田朗】

◇　◇

最初のスピーカーは、スポーツ関係の職場で管理職として働く高野保子さん(ニューホープ東京教会員)。昨年、同プロジェクトが行う「信仰と仕事シーズン1コース」(全8回)を受講。「残業や出張が多く、いつもストレスを抱えながら働いていた。24時間のうちのひとコマだけ神様との時間に割り当てるような生活を変えたいと思った」

「真の偶像とは、仕事の奥に隠れているものだが、私にとって仕事は偶像ではなかった」と言う。「心も身体も疲れ果て、神様を遠く感じてしまうから仕事が偶像になっていると思っていた。だが、仕事はもともと良いもので、仕事そのものが悪いのではない、むしろ自分自身が偶像だと気づかされた。自分の能力に対する過信が偶像だった。そのことが理解できた時、清々(すがすが)しい敗北感を覚えたことを鮮明に覚えている」。「以前は他人にいらだち、そんな自分に罪悪感さえ覚えていた。だが、今は以前よりいらだつことがなくなった気がする。また、イライラを感じるたびに立ち返る必要性をより感じるようになった」とも明かした。

二人目は会社員の木村聡哉さん(浅草シティチャーチ会員)。仕事は、中国オフィスと日本オフィスを国際通信でつなぐサービスの提供だ。

木村さんも、昨年の「信仰と仕事シーズン1コース」を受講。その中で、①神様が最初になされたことが仕事で、その仕事に満足され喜ばれたこと、すなわち「仕事」自体は神様が良いものと認められているということが示され、仕事に対する思いが変えられ大きな励ましを与えられた、②自分自身、神様の方向を見ずに仕事をしていたことに気づかされた、と言う。特に②に関しては、「成果を認めてほしい、何か成し遂げないと自分の価値はないのでは、といったこの世の価値観で卑屈になっている自分に気づかされた。でも神様の目線は私たちとは違う。仕事も神様への礼拝であるというメッセージが心に強く響いた」。Ⅰコリント10章13節の御言葉を引用し、「仕事も、ただ神様の栄光を現わすためにしていきたい」と語った。

二人の話の後、「自分自身の心にある偶像は何か?」「仕事の中で神様に祈ることはあるか?」などについて、各グループでディスカッションした。ディスカッションでは、「あまり神様のことには向かずに、業務上のことばかりを考えてしまっていた」、「仕事で失敗した時、祈りによって切り替わることがある」、「イライラしている同僚のために、イライラが鎮まるようお祈りしている」などの感想が聞かれた。